

とくわい



2025 年 9 月 16 日 NO.679

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会 広報部
〒460-0018 名古屋市中区門前町1番23号

東海教区教務所内

TEL 052-321-0028 FAX 052-332-4097

e-mail info@tokai-hongwanji.net

東海教区海幡組 活動報告

海幡組は、愛知県西三河南部の旧碧海郡、旧幡豆郡エリアに存在する 21 ケ寺で構成され、組名はこの両郡から一文字ずつ取って決められました。組の南部は三河湾に面し、組全域では西尾茶、鰻、筆柿、白醤油などの名産品が知られ、また吉良上野介、作家の尾崎士郎ゆかりの地を有することからマリンレジャー・グルメ・歴史探訪目的の観光客が近年増加しています。

当組では、多種組織が活動し行事を執行しています。

毎年会所をかえ、京都より講師を招き 2 日間開催される仏教講習会は明治 36 年より 122 年続く伝統行事です。

寺族青年連盟は月 2 回聖典勉強会を開催し、その内の一回は数人の大谷派僧侶と合同で研究し、切磋琢磨しながら交流を深めています。

仏教婦人会は、毎年 6 月に布教使のみならず作曲家、作家など多様なジャンルの講師を招き会場が満堂になる研修会を 30 年以上開催し仏教婦人育成に尽力しています。

他にも、門徒推進委員会は積極的に連研を牽引し、毎年年度末に外部講師による同朋研修会を開催しています。

コロナ禍で休会していたキッズサンガは昨年再開し、昨年と本年の大会で以前の活気と絆を取り戻すに至りました。

各組織、僧侶と門信徒が和を大切にし前向きな意見を出し合っの活動が海幡組の特徴であり、今後はさらにその和と輪が広がり、組の枠を超えた交流が盛んになればと念じていることとございます。

Contents

海幡組活動報告	P1
ころもばなし	P2
部会紹介	P3
特集	P4.5
声/書棚/編集後記	P6



仏婦研修会
の様子

『出会いなおす時間 ご法事で聞かせていただく 戦争体験』

山田 智敬（鈴鹿組存仁寺）

先日、祖父のご法事をお勤めさせていただきました。ご門徒様方、そして遠方からの親戚もご縁に会って下さいました。ご法事が終わり、お斎をいただいている時でした。「あの時はああだった。」「この人はこうだった。」と、なつかしい話に花が咲き、先にお浄土へと参られた方々が、すぐそばにいてくださるような温もりを身近に感じることでした。近年縮小傾向にはありますが、改めてお斎の時間の大切さを感じました。

「兄はな、もともとは医者になりたかったん。」ふと、祖父の妹さんが、お内仏の祖父の写真を見ながら、祖父が僧侶として歩んだきっかけを話はじめられました。

「そやけど、戦争やろ。兄も戦争にいったわ。戦争が終わって、帰ってきてびっくりした。突然、お坊さんなる、言い出して。ほんで、龍大（龍谷大学）行って、浄土真宗勉強したんや。」

妹さんの伊勢弁を、その場にいた全員で真剣に聞かせていただきました。妹さんは祖父に、戦争を経験する中で、どういう心境の変化があったのかは、聞かなかつたし、話もしなかつたようです。しかし、祖父が自身の死や、友人の死など、たくさんの悲しみ、苦悩を身近に経験したのは間違いない。そして、いのちを救っていく道を仏教に聞いていったと思う、と聞かせてもらいました。若かりし祖父の思いと出会うと同時に、仏法の中に平和を聞き開いてゆこうとした姿に手が合わさることでした。

戦後80年の今年、各地の様々なところで平和に関する行事が開かれました。一方で、戦争を経験された方々がご高齢となり、その体験を直接伺うことが難しくなっていることも現状です。この80年の歩みは、戦争を体験された方々の憎しみや悲しみの連鎖を二度と繰り返さないようにするという、平和に対する強い思い、願いの中での歩みではなかったでしょうか。互いに排除し、いのちを奪い合う戦争は、すべてのいのちのしあわせを願う阿弥陀さまの願いとは一番遠いところにあるものです。まさに、縁次第で戦争を引き起こしかねない危うさを持つ私たち人間こそ、阿弥陀さまが救わずにはおれないと願われた存在です。そして今、「南無阿弥陀仏」の喚び声となって、絶えずこの私を喚び続けておられます。常に自己中心的な考えの中にあり、縁に触れば、他者を傷つけ、自らも傷つけていく私。その私を、涙を流しながら抱きとめられ、地獄を作る姿ではなく、お浄土へ生まれる姿として生きておくと、私を教え、導いてくださっています。お念仏の声を通して、阿弥陀さまのはたらきに導かれるなかで、自らのいのちの姿を省みていく姿が恵まれていくことです。

ご法事は、先にお浄土へと参られた方の姿や思い出や言葉を偲びつつ、阿弥陀さまの願いを聞かせていただくご縁です。特に、今年のご法事では、阿弥陀さまの願いの中に平和を聞き開いてゆこうとした方々の姿に出会わせていただいたことでした。



「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会ってどんな組織？

おしえて第4弾

いよいよ今回がご紹介の最後だよ。皆さんいろんな活動をされているんだなあ。



布教団

●具体的な活動・予定●

- ・各寺院における法要・法座及び本山・教区内常例線（三重・三河1～3線）への出講
- ・布教大会、研鑽法座、青年布教使大会の実施。
- ・第2連区（東海・中部・北陸教区）布教団研修会への参加
- ・各寺院への布教使の幹旋



副団長
代表委員
山田教尚

●活動の課題●

- ・阿弥陀如来の「智慧」と「慈悲」が正しく、わかりやすく、ありがたく伝わる工夫、研鑽
- ・ご法座の活性化、聴聞のご縁をいただく方の増加
- ・次世代につながる布教使の育成

●読者へのメッセージ●

ともに聞き、ともに伝え、ともにあじわってまいりましょう

少年連盟

●具体的な活動・予定●

サマーキャンプ、本山参拝、別院報恩講子ども書道展、ほとけの子ども通信、ごんごん新聞の発行、オリジナル式章の販売、第2ブロック等の指導者研修会への参加等



理事長
楠原純悠

●活動の課題●

参加者（理事を含むスタッフの人員）の少なさがあります。コロナの影響で休止期間があったので次世代の経験引継ぎが不安です。

●読者へのメッセージ●

少年連盟は大人のスタッフの方々の協力がなければ子どもたちが安心して楽しむことができません。多くの方に協力いただけますとありがたいです。



改めて、原稿をお寄せくださった皆さま、ありがとうございました。（編集部長 日野）



仏教青年連盟

●具体的な活動・予定●

昨年度は、東海教区仏教青年連盟の僧侶を対象に、名古屋別院界隈の寺巡りを行わせていただきました。他宗派寺院と浄土真宗本願寺派との違いや、寺院の現状やその地域の歴史が知れました。また現代に合わせ、「改革」に取り組まれている寺院にも訪問し、大変興味深い寺巡りでした。

本年度は、「仏教青年のつどい」として、陶器づくり体験をやりようと思っています。青年の方だけの参加ではなく、親子などでも楽しめるような企画を検討しています。



委員長
中井健二

●活動の課題●

参加者も、運営している側も「楽しかったな、また集まりたいな」と思っていただけの活動を企画できれば、と思っています。

●読者へのメッセージ●

仏教青年の活動は、みんなで楽しく過ごすことで、お互いの事を知ることのできる有意義な場所です。活動を通じて、仏教が、浄土真宗が、より身近なものに感じて頂ければと思います。

仏教青年連盟の活動の輪をひろげていくために、みなさまの参加をお待ちしております。

子ども・若者ご縁づくり推進委員会

●具体的な活動・予定●

昨年度はとくに生きづらさを抱える子どもたちについて学ぶことをテーマにしました。3月26日に古川潤哉さんをお招きして研修会を行いました。また、認定NPO法人おてらおやつクラブが発行している『声』の冊子を全寺院院発送し、教区内のお寺さまに子どもの貧困問題について知っていただき、自分たちに何ができるか考えていただく機縁となりました。



副委員長
松野尾浩慈

●活動の課題●

青少年教化の重要さはわかっていただけのお寺さまは教区内にも大勢居られます。一方で、すぐに結果に結びつく活動ではないため、重要だと思っただけでもなかなか手をつけられないという声も聞かれます。

●読者へのメッセージ●

現在お寺にお参りされる方の多くは、子どもの頃からお寺で遊んでいたとか、祖父母に連れられてお参りした記憶があるような、お寺に親近感を覚える方々です。現代でもお寺は子どもの居場所になりえる場所です。子どもの居場所になれるお寺は多くの人にとって居場所となれるお寺ではないでしょうか。

「また行きたい」が生まれるご縁づくり (事例紹介)

近年、「どうすれば地域や若い世代とのつながりを深められるだろうか」と悩むお寺も少なくありません。本記事では、思わず「また行きたい」と感じてもらえるような、お寺ならではの魅力を活かしたご縁づくりの具体的な取り組みやアイデアをご紹介します。地域と共に歩み、新しいご縁を結ぶヒントをぜひお役立てください。

くわなキッズサンガ

桑名組では毎年夏休みに「くわなキッズサンガ」として、子ども向けのイベントを行っています。今年は7月31日に行われました。



たくさんの参加者

日頃からのご縁づくりを大切に

今年は養泉寺さまを会所におこなわれました。子どもだけで70名、保護者も含めると100名を超える賑やかな会となりました。養泉寺さまは保育園を併設している他、夕方からは「寺子屋」として近隣の子どもたちに境内や本堂を開放してみえます。日頃より子どもとのお縁を大切にしてみえるお寺さまです。



お勤めのような



「蜘蛛の糸」
読み聞かせ



ペットボトルの
キャップ積み



「六道」の掛軸

はじめて本堂に入るという子どもも少なくありません。合掌礼拝の仕方などの作法を住職より説明いただきました。「六道」の掛軸を子どもたちは興味深そうに見ていました。

シャボン玉パフォーマンス



子どももうれしい、親もうれしい。



子どもたちは大喜び



水鉄砲のようす

今回のアンケートより「ポスターを見かけて初めて参加しました」「子どもはお寺でのおつとめが初めての経験でした」「豆うつしやキャップつみは地味ながら夢中でやっていて面白かったみたいです」「すごく集中してミニゲームをしている姿を見ることができました」といった声をいただきました。子どもたちが楽しむ姿や、いつもとは違った一面に触れることは、親にとっても大きな喜びです。シャボン玉遊びができる境内や、初めて本堂でのお勤めを体験する機会など、お寺ならではの魅力を再発見し、子どもを通じて大人も楽しめるような「ご縁づくり」が大切ではないでしょうか。

朝明組 明円寺「寺っ子体験」の場合

年に一度のお寺参りも今年で4回目。ご近所の子ども達に声をかけて「寺っこ体験」をしています。コロナ禍の子ども達を応援したい。その思いに賛同して下さった鈴鹿にあるカフェ「ナフブラン」とのご縁がきっかけで始まりました。毎年夏休みにしていたのですが、去年のあまりの暑さに今年は5月のGW明けの日曜日に開催しました。本堂に入ってくる風が気持ち良く、子どもも大人ものんびりと過ごせたように思います。



canvaで作成



6年生には役配が



廊下でダッシュ



縁側のおそうじ

🌸 — 毎年の決め事 — 🌸

- 1：時間は9時半から13時頃まで。お昼ご飯はカフェ「ナフブラン」によるカレーと、かき氷をいただきます。（子どもは無料、大人は投げ銭制度をとっています）
- 2：寺っ子体験なので、みなでお勤めをすること、若院の短い法話を聞いてもらうこと、そしてチームに分かれて本堂や縁側、廊下の拭き掃除などをしてもらいます。
- 3：みんなあまり無理しないこと。細く長く続けていけるように心がけています。



消しゴムはんこを選
んで→



コースター作りと
母の日の手紙



ジャータカルタ



白熱しました！



お掃除のお礼として
御斎カレー



大人気のかき氷

今年は約40名ほどのお子さんが参加してくれました。親御さんから意外にも好評なのは、お寺のお掃除です。自分の手で寺を綺麗にすることは、普段なかなかできない体験であり、物を大切にする心や感謝の気持ちを育むきっかけにもなります。そして何より、掃除を通して近所にあるお寺が「自分達のお寺」「安心できる場所」へと変わっていくことを願いながら微力ではありますが仏縁の種まきをこれからも続けていけたらと思います。

『地球の中での人間の時間』

少し前にテレビで映画『ジュラシック・パーク』が放送されていた。画面の中の恐竜をみていると小学生の頃に恐竜にはまって図書室で本を借りてきてよく読んだり、恐竜が題材のアニメやゲームに夢中になっていたことを思い出す。特に小学生の頃の夏休みの自由研究でスケッチブックに恐竜図鑑の絵を印刷して貼って、特徴をまとめて「ぼくの恐竜図鑑」を作ったのが一番の思い出である。

ところで恐竜図鑑には恐竜の特徴や種類などだけではなくおまけのような形で、地球の歴史なども載っていた。地球の誕生から生物の発生、人間が現れて現在の歴史に至るまでが載っている図鑑なども多かった。

地球ができたのは約 45 億年前だったとされる。我々ホモ・サピエンスが現れたのは約 30 万年前ほどだったとされる。子どもの頃の私は地球の歴史からみると人間の歴史ってすごく短いんだなと思ったものである。どれぐらい短いのかを例えたものがある。地球がうまれてから現在までの歴史を一年間のカレンダーにたとえた様子ものっていた。それによると人類は 12 月 31 日の夜 11 時 50 分くらいにやっと生まれたのだという。地球の歴史では人類はまだまだ幼くあつというまでである。地球の一部としてこの私がここにいるのも色々な縁が重なった結果である。その上で今仏法にであったということはもっと不思議だと思う今日であった。

～お坊さんの書棚～

『人間失格』

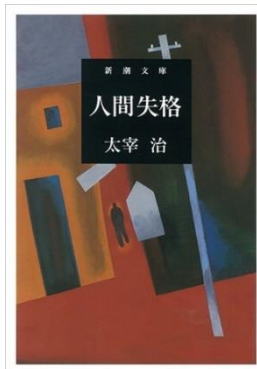
私が太宰治と出会ったのは、大学 2 年生の時でした。最初は、なんだかカッコつけたがりの付き合いにくそうなヤツ。と思っていました。しかし、文章のリズムに圧倒され、人間味溢れた言葉に魅了され、今では「我が親友！」と心で叫びたくなるまでに好きになってしまいました。彼の魅力を少し私なりに考えてみると、「人間の嘘」に正面から向き合ったことだろうな、と思うのです。

本作において、主人公である大庭葉蔵は「道化」を演じて日々を送っている男です。お茶目、ひょうきん者。世間からそのような評価を与えられることで、アイデンティティを獲得しようとしておりました。嘘の自分と、本当の自分。その矛盾にしがき苦しみ、徹底的に本当の自分を探そうとした結果、その本当の自分というのも嘘にまみれていて、どれだけめくっても嘘しか出てこない苦しみ。私は作品を読んで、そのような印象を受けました。

著 太宰治 出版 新潮文庫

太宰治は、キリスト教をテーマとした作品も多い作家です。しかしその中でも、仏教的だなあと思う文章があり、非常に興味深いです。終盤、大庭葉蔵は精神的に衰弱してしまいます。モルヒネ中毒となり、世間には「道化」ではなく「狂人」とレッテルを張られ、入院生活を送ることになります。「人間、失格。もはや、自分は、完全に、人間で無くなりました。」そんな精神状態の中で、彼には辿り着いた境地がありました。

「ただ、一さいは過ぎていきます。自分がいままで阿鼻叫喚で生きて来た所謂「人間」の世界に於いて、たった一つ、真理らしく思われたのは、それだけでした。」読み終えた後、この言葉が強く印象に残っておりました。



～編集後記～

気がつけば、組内に年下の後輩が増え、教区の行事や研修会でも新しい仲間の姿を見かけるようになりました。法要の準備や会議の進行など、自分も中堅として動く場面が自然と多くなっています。時代は移り変わっても、人が悩み苦しむ現実是不変わります。だからこそ、お念仏のみ教えを受け継ぎ伝える営みは普遍の意味をもちます。その伝え方には工夫が求められますが、新たな人と共に歩みを進めていきたいと思います。

某広報部員